

Title	2)「研究開発コロキウム」報告〔要約版〕：〔グローバルCOE〕採択：介護における「負担」観から新たな価値観の創造に向けて
Author(s)	鮫島, 輝美; 杉万, 俊夫; 竹内, みちる; 竹家, 一美
Citation	研究開発コロキウム：平成21年度 成果報告書 (Colloquium for Educational Research and Development) (2010): 16-17
Issue Date	2010-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/143165">http://hdl.handle.net/2433/143165</a>
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

## 介護における「負担」観から新たな価値観の創造に向けて

For the creation of new values going beyond the view point of “burden”  
in care for elderly

研究代表者 鮫島 輝美 (D2)          教員 杉万 俊夫  
研究分担者 竹内 みちる (D3)      竹家 一美 (D3)

### 〔研究目的〕

本研究の目的とは、「介護＝負担」として語られる現状とは逆に、フィールド研究で出会った介護者たちが、介護を負担ではなく、自分の「成長・学びの場」とであると受け止め、積極的に引き受ける語りをすることに着目し、介護の「肯定的価値観」を抽出し、現在の介護問題の根底に流れる「負担感」がどのように社会的に構築されたのかを歴史・文化的視点から整理することである。それによって、今後ますます重要になってくる介護が、実際の介護の受け手、担い手のレベルにおいて「負担」観を超えたパラダイムシフトをするために、どのような新しい価値構築が必要なのか、について考察する。

### 〔研究経過〕

前期は、ケアをめぐる論文を担当者ごとに分担し、「ケア」と取り巻く環境において、どのような議論がなされているのかを検討した。また、メンバーだけでなく、本コロキウムには西山氏(教育学研究科 D1)や鈴木氏(医学部人間健康科学学科、助教)に参加いただき、毎回の議論において分野横断的に、多角的な検討をすることができた。後期は、地域において先鋭的なケアサポートを行っているフィールド調査によって得られたインタビューを読み合わせ、「ケア」についての様々な議論を行った。

上記活動より得られた論点は多岐にわたり、互いを刺激し合う議論となった。そこから得られた論点を元に、前年度に得られた課題に沿って、論点を集約していった。

### 〔研究成果〕

以下、昨年度に抽出した6つの課題にそって、研究成果をまとめる。

- (1) 「大変だ」という disadvantage を advantage にすること

### (3) ケアする者とされる者の「他者性」

我々は、家族介護者 T 氏の「介護は失敗、ピンチの連続」「ピンチはチャンス」という言説に注目した。T 氏にとっての〈失敗〉〈ピンチ〉とは「自分（介護の与え手）の都合と相手（介護の受け手）の都合が一致しない場合」を指していると捉えた。そのため、自分の都合を考慮せず、相手の都合に徹底的に寄り添い、相手の他者性を受け入れ、自らの自己同一性をも変化させることを厭わない態度が、状況を良い方向に動かす〈チャンス〉となっていた。

(4) 「認知症」をどのように捉えるのか：我々は、「認知症」を大澤(1990)、杉万(2006)のいう身体の「解け合い」による「第三の身体」という規範の形成能力が後退している状態であると考えた。そのことにより、妄想、徘徊、失禁などの問題行動を分析でき、同時に、認知症に対人的な援助が最重要であることを理論的に示唆できた。

(2) 排除による全体パフォーマンスの変化に関する数理モデル：一般に「役に立たない」人を集団から排除することによって、全体のパフォーマンスが上昇すると考えられている（例えば、リストラなど）。しかし、実際は、「役に立たない」外部をいれることによって、全体のパフォーマンスが逆に上昇する場合もあるのではないかと、という問いが、フィールドワークから立ち上がってきた。これを、数理言語によってシュミレーションするためのモデル構築を行った。本年度は、最終的なモデルの完成には至らなかった。よって、途中経過を報告する。(a) 上述した現象と同型の現象と見られる例を収集した。これは、モデル構築に際し、より具体的な状況を想起するためである。次に、(b) モデルの構築に必要と思われる要素の列挙を行った。この段階では、ブレインストーミングの要領で、最終的なモデルに組み込むか否かは考慮の対処としなかった。(c) その中で既存の研究との類似要素の選定を行い、現実的に、モデル構築を行うために、有用な概念とモデルを収集した。

(5) 大きな自己：調査で出会った高齢者たちは、日常の中で互助し合うことを「当たり前の行為」として受け止め、「明日は我が身（だから）」と説明した。我々は、この言葉が意味する状態を、自己のサイズの大きさという観点から考察を深めようとした。

ここから、本年度は「大きな自己」を想起させるような発言を、フィールドワークから拾い上げることができた。また、介護における「なぜ、私が担わなければならないのか」という義務言説を超克した視点の必要性を、具体的な形で示唆できた。

(6) 介護「負担観」の歴史的構築：地域のネットワークの状態に沿って、戦後の介護「負担感」を分析した。ネットワークは、互いに支え合う環節型と、政府主導の集権型に分類できる。戦後は環節型で、互助関係が当たり前であったが、集権型の制度が整う中で、70年代を境に環節型ネットワークは崩壊し始め、家族に介護が重くのしかかった。困った家族は医療制度に頼り、「社会的入院」として社会問題となった。このように最初は、担い手の数不足から、やがて高齢者の位置づけが変化するとともに、社会の「負担」と認識され、「介護＝負担」という等式が未だ保存されていると考察した。